

群 教 ゼ	K05 - 03
	平 15. 213 集

# 主体的に外国人とかかわろうとする児童を 育成する指導法の工夫

「ALTとあそぼう」によるコミュニケーションの工夫を  
通して

特別研修員 檀原 諭

## 《研究の概要》

本研究は、遊びを通して、外国人と積極的にコミュニケーションをとろうとする児童を育成するための研究である。生活科において、ALTとの遊びの中で、児童が自分たちの考えた方法で遊び方を工夫して伝えたり、ALTの用意した遊びの説明を理解しようとするれば、言葉が通じなくても楽しく遊べて、新しい人間関係を築くことができるということを、実践を通して明らかにしようとする。

【キーワード： 国際理解 遊び ALT 生活科 コミュニケーション】

## 主題設定の理由

本校の児童は、市内市外のさまざまな幼稚園、保育園から入学してくる。入学時に初めて顔を合わせる相手でも4～5月のうちにお互いなじんでしまう。また年度途中からの転入生に対しては、どの学年の児童も、仲間として違和感なく受け入れている。しかしこのことは、日本語が通じる場合に限定されている。先日、ミャンマーから男子児童が6年に転入してきた。全く日本語がわからず話せない彼に対して、クラスメイトたちは必要なかわりしかもとうとしない。むしろ敬遠しているようなそぶりさえ見られる。本校児童の共通の問題点は、言葉が通じる相手には寛容で優しいが、そうでない相手には傍観者的で、かかわることに消極的になってしまう点にある。そして結果的に、そのことは相手にとって冷たい態度と受け取られてしまう。

本学級の児童（小学2年生 34名）は週に1度英語活動教諭補助員による英語の授業を受けている。その中で児童は英語に興味をもってはいるが、実際に外国人とかかわった経験がある児童はほとんどいない。小学生のうちに、言葉の壁を越えてお互いの気持ちが通じ合う経験をすれば、自分の気持ちを伝える楽しさや相手の思いがわかる楽しさを理解できるであろう。その経験は大人になったとき、相手が外国人であっても臆することなくコミュニケーションをとろうとする態度につながると考える。コミュニケーションをとることで新しい人間関係ができ、さらにそこから様々な人的ネットワークの広がりが期待できる。そこで、外国人と一緒に遊ぶことで言葉が通じなくても楽しく遊ぶことができることを経験させたい。遊びの中で児童は、外国人がルールを共通理解しているかとか、楽しく参加しているかなど様々なことに気付くであろう。児童には、言葉が通じないからこそ鋭い観察力が必要になる。「遊び」という体験を通して、児童にコミュニケーションの重要性に気付かせることを経験させたいと考え、本主題を設定した。

## 研究のねらい

生活科「ALTとあそぼう」において、児童が外国人と一緒に遊ぶ活動を行えば、言葉の壁

を越えたコミュニケーションが成立し、進んで外国人とかかわろうとするようになることを実践を通して明らかにする。

## 研究の見通し

- 1 「ALTとあそぶためのじゅんびをしよう」において、児童が言葉の通じないALTとの遊び活動を計画し遊びやルールの説明に必要な表現方法を考えたりすれば、相手に自分の思いを伝えたいという意欲が高まるであろう。
- 2 「ALTとあそぼう」において、児童が共通理解をしながら遊びをするなかで、ジェスチャーやボディランゲージを取り入れれば、言葉が通じなくてもコミュニケーションがとれることに気付くであろう。
- 3 「てんこう生となかよしになろう」において、児童が架空の外国人転校生と生活する状況を想像した上で実際に外国人転校生R君と一緒に遊べば、外国人の転校生であっても進んでコミュニケーションをとろうとし、積極的にかかわろうとするであろう。

## 研究の内容

### 1 基本的な考え方

#### (1) 用語の解説

ア 「進んでコミュニケーションをとろうとする児童」とは

言葉がよく通じなくても積極的に相手とかかわりをもち、様々な工夫で自分の考えを相手に伝えたり、相手の考えを理解しようとする態度が身に付いた児童である。言い換えれば見知らぬ人ともかかわりあえる積極的な態度、友好的な態度、相手のことを思いやる態度が身に付いている児童のことである。日常生活においては、生活科の町探検の学習の中で、初めて出会う人ともきちんとあいさつができた、質問したり、お礼が言えたりできる態度が身に付いていることが必要である。

イ 「遊びをするなかでコミュニケーションがとれる」について

人は遊びをする時に、ルールを共通理解しておく必要がある。文化の違う外国人とは同じじゃんけんでもタイミングが違っている。そこで日本の遊びをする際は、日本のルールを相手に説明し、外国の遊びをする際は相手側のルールを理解しようとする努力が必要になってくる。お互いが共通理解できたとき、児童はコミュニケーションの成立した喜びを味わい、それが次の活動への意欲にもつなげると考える。

ウ 英語活動教諭補助員について

「ALTとあそぼう」の授業の前に英語活動教諭補助員に簡単な自己紹介のしかたを教えてもらい、コミュニケーションの有効な手段の一つとして活用する。

エ ALTについて

ALTを英語指導の目的でなく、児童のコミュニケーション能力を高めるための手段として活用する。現在、館林市では5人のALTが中学校に所属している。5人に指導してもらうことで、児童一人ひとりのALTとコミュニケーションをとる機会がより多くもてると考える。彼らは全員20歳代前半で、積極的で友好的な態度である。そのような彼らと知り合うことで、積極性や友好的な態度を学んで欲しいと考える。また、日本語の理解力もあるので、事前の打ち合わせの際、授業の意図を理解してもらえらるだろうと考えた。これらのことから、交流の相

手としてALTに協力を依頼した。

ALTには事前の打ち合わせで、児童がどのような方法で遊びの内容を説明する予定なのかを伝えておく。また、ゼスチャーは大げさにしてもらい、言葉にたよらない理解を心がけてもらう。さらに、ALTは日本語をできるだけ使わないように心がけてもらうことを伝えておく。

オ 「てんこう生となかよしになるう」について

架空の外国人転校生「ファン」君が自分たちのクラスに転校してくるという設定で、児童に言葉が通じない相手と一緒に生活することを真剣に考えさせる。アンケートに「ファン」君が隣の席になってもいいかどうかを書いた後、コミュニケーションをとろうとする時にどのようなことを気をつけたらいいか話し合う。5日後、本校の外国人転校生6年生のR君に教室に来てもらい、一緒に遊んでもらう。R君は、7月に転校してきた外国人で日本語はほとんど話せない。日本語の理解も初歩の段階である。児童にR君と遊ぶ際、よりよいコミュニケーションを心がけさせながら、実際の場面でも積極的に行動できるようにさせたい。

(2) 全体構想図 (図1)

## 2 実践の概要

考察については学級全体と抽出児(A男、B子)の表情、アンケート、活動計画、感想等の分析を通して行う。

A男：だれに対しても公平に接し、弱い立場の友だちに対して優しい面を見せるが、やや引っっこみ思案で慎重すぎる感じもある。

B子：自分で判断して行動する自主性が見られる。初対面の人に対しては、自分から進んで話しかけるほど積極的ではない。

(1)「ALTとあそぶためのじゅんびをしよう」の

授業で自分たちのやりたい遊びやルールの説明に必要な表現方法を考えることで、相手に自分

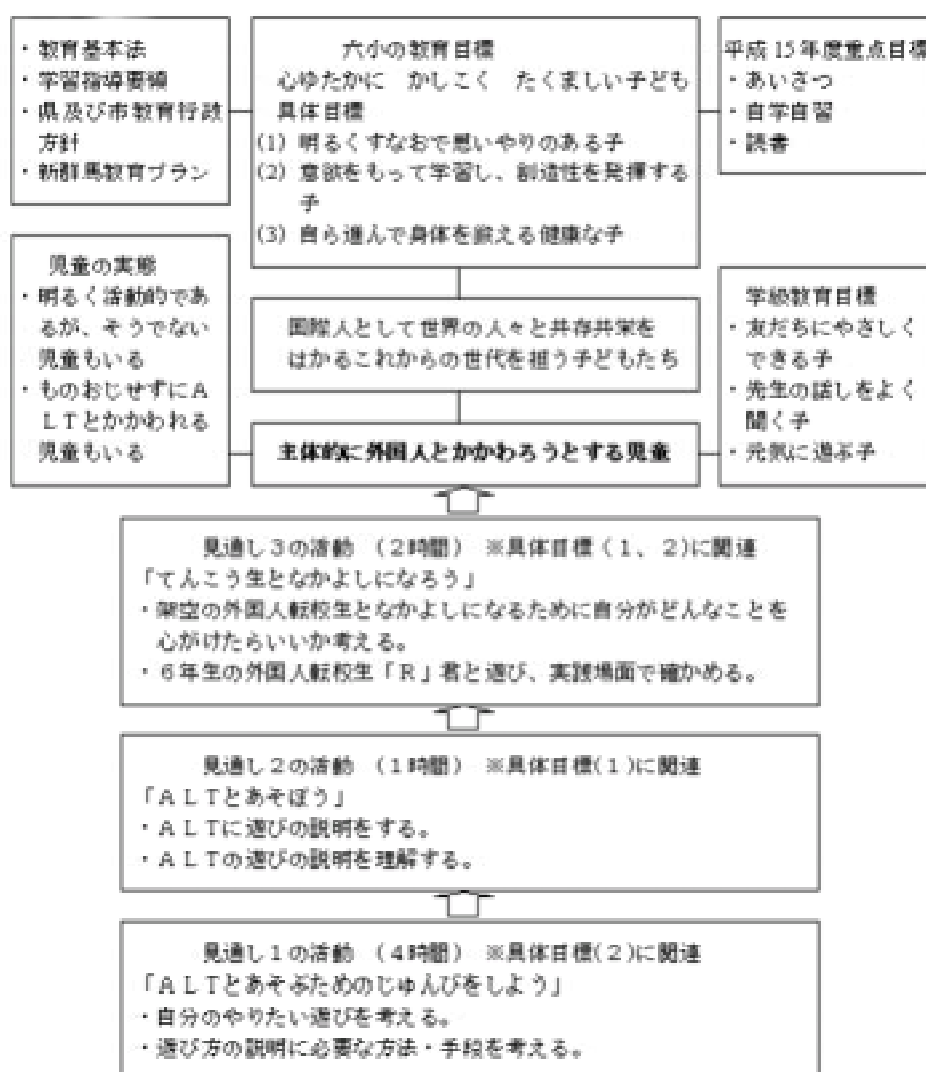


図1 全体構想図

の思いを伝えたいという意欲が高まったか。(見通し1)

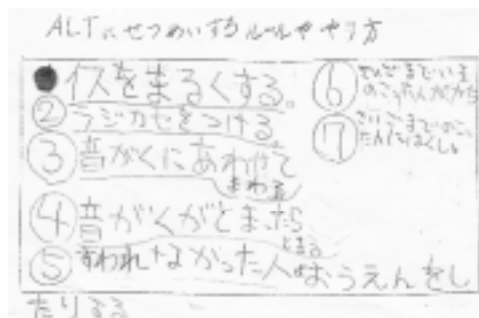
#### ア 実践の概要

事前にアンケートを行い、「あなたは知らない外国人に会ったとき、どんなことを考えますか」という質問で初対面の外国人に対する意識を調査した。積極的にかかわろうとしない児童が約15%いた。この中にA男とB子が含まれていた。遊びの内容は1班(フルーツバスケット)、2班(進化ゲーム)、3班(いすとりゲーム)、4班(じゃんけんポイポイ)、5班(ねん土で作る動物園)である。

#### イ 結果と考察。

このうち、1班とB子の所属する3班の内容は普段からよく行っている遊びでもあり、活動の流れを細分化し説明を分担するなど作業が順調に進んで、資料1のように具体的に計画し意欲的に活動していた。B子の活動計画には説明の方法に「ジェスチャー、ときには日本語」と書かれていた。また、2班はゲームの説明を紙しばいを作成して行うという方針がはっきりしていたため、メンバーが仕事を分担しながら活動を進めていた。一方A男の所属する4

資料1 活動計画



班は、紙しばいで説明するという方針は決まっていたものの、体の動きを細分し絵に表すのが難しく、四苦八苦していた。そこで、説明が行きづまったときにはジェスチャーで伝えるよう助言した。

活動計画から、フルーツバスケットやいすとりゲームなど内容が単純でルールが簡単なものの方が、児童が活動の計画を立てやすく、意欲的に活動していた。反対に4班の(じゃんけんポイポイ)は、体の動きが複雑で変則的なルールであるため、児童はそれをどう伝えたらいいのか迷ってしまった。

(2)「ALTとあそぼう」において、児童が共通理解しながら遊びをするなかで、ジェスチャーやボディランゲージを取り入れれば、言葉が通じなくてもコミュニケーションがとれることに気付いたか。(見通し2)

#### ア 実践の概要

7人ずつの5グループに1人ずつALTが入って、グループごとに遊びを行った。まず事前に練習した自己紹介から始まり、資料2のようにALTに1人ずつ遊び方の説明を行った。前半は児童が準備した遊びをし、後半はALTの説明を聞いてから、ALTが用意した遊びを行った。

資料2 遊び方の説明をする児童



#### イ 結果と考察

アンケート2「あなたはALTに遊びの説明をすることができましたか」

・よくできた 25人 ・よくできなかった 9人

A男は授業後のアンケートに、「遊びの説明が良くできなかった。わけは絵を見せてもよくわからなそうだったから」と書いていた。B子は「遊びの説明が良くできた。いすとりゲームのことを知っているのかな」と書いていた。

「ALTとのあそびはどうでしたか」には34人全員が楽しかったと答えた。説明にはとまどったものの楽しく遊べたことがうかがえた。「ことばがつうじなくてもあそべるんだなと気がついた」と書いた児童もいた。A男は感じたことや気付いたことで「ALTのC先生に日本語でおしえているのに、日本語がつうじているみたいだった」と書いていた。このことからC

先生は、児童の説明でどうしても理解できないのでやむなく日本語で理解していたことがうかがえた。

以上のことから、コミュニケーションをとるためにはお互いが共通認識をするためのベースとなるもの（よく知っているゲームや遊び）が必要であり、ゼスチャーやボディーランゲージは必ずしも重要ではないことがわかった。今回A男の班は共通認識をするためのベースが適切でなかったと考えられる。またB子の班は共通認識をするためのベースが適切だったので、ALTの反応にコミュニケーションの手応えを感じたと思われる。

(3)「てんこう生となかよしになろう」において、児童が架空の外国人転校生と生活する状況を想像した上で、実際に外国人転校生R君と一緒に遊べば、外国人転校生であっても進んでコミュニケーションをとろうとするようになったか。（見通し3）

#### ア 実践の概要

日本語の全くわからない外国人「ファン」君が転校してくるという架空の話をした後、アンケートで「ファン君をあなたのとなりのせきにしてもいいですか」と尋ねた。「ファン」君が架空の人物であることを説明した後、6年生の外国人転校生R君と遊ぶ計画を立てさせた。R君は7月に来日したばかりで日本語はほとんど話せない。遊びはフルーツバスケットとオーストラリアン・フットボールを行うことになった。そこで、ALTと遊んで感じたことを話し合っ、R君と遊ぶ際に注意すべき点の参考にさせた。その結果「ALTのあそびのせつめいがえいごでもわかりやすかった」「ALTがゆっくり話してくれた」「ALTが、わかったかどうかたしかめていた」「私たちがおぼえるのをまっけてくれた」などの意見が出された。これらをもとにR君にゲームの説明をするときに注意する点を確認した。5日後にR君と遊び、その後で感想を書かせた。

#### イ 結果と考察

架空の転校生「ファン」君についてのアンケート「ファン君をあなたのとなりのせきにしてもいいですか」の結果は・「はい」 25人 ・「いいえ」 9人であり、実際問題として外国人と接することに不安を感じる児童がまだ多いと感じた。その理由は（不安だから4人 恥ずかしいから2人 英語が分からないから2人 隣だといや1人）であった。隣だといやと答えた児童は、「ファン君が廊下でこまったかおをしていたらあなたはどうしますか」の質問には「どうしたのって言う」と答えており、拒絶ではないが不安を感じている、ととらえることができる。B子は「はい」、A男は「いいえ」と答えており、A男の理由は「なにか、もしわからないことをきかれるかもしれないから」と書いている。結果としてA男の不安感を取り去ることはできなかった。

R君に関する第一印象を尋ねたところB子をはじめ「どんどん話しかけて友だちになりたい」と答えた児童が10名。「話しかけてみようかな、友だちになれるかもしれない」が17名であり積極的に関わろうとする姿勢が感じられた。

R君との遊びでは、B子がフルーツバスケットの説明役に立候補した。B子はR君へのゲームの説明を資料3のように工夫していた。初めは声が小さかったがR君がうなずくの

#### 資料3 C子の説明の工夫

2 あなたは「ファン」君とおそとき、どんなことに気づきましたか。

くんがわかるようにあんまりながくしないでみじかくしてせつめいをした。

3 あなたは「ファン」君とおそんでみて、どんなことを感じましたか。

お友だちになれるかもしれない。もてあそびたいな。

見て、次第にはっきりした声で説明するようになった。また説明の後で「わかった？」と確認していた。相手のことを考えてコミュニケーションをとろうとする態度が表れていた。また、遊びの後の感想ではR君との新しい人間関係ができたことへの気付きが感じられた。このように、B子は当初、外国人とかかわることに不安を感じていたが少しずつ積極的に行動できるようになっていった。

後半のオーストラリアン・フットボールでは、3班、4班の児童が中心になってR君に代わる代わる説明した。単純なルールなのでR君もすぐ理解できた。授業後の休み時間も続けて遊ぼうとR君の手を引いて数名の男子児童と一緒に遊んだ。

翌日、児童にR君に会ったらあいさつや合図をしようと呼びかけたところ、ほとんどの児童ができると答えた。「ぼくたちのクラスにも本当にファン君が来ればいいのに」と外国人転校生を期待する発言には多くの児童がうなずいていた。R君との遊びを経験した後は外国人転校生をより身近な存在として感じるようになった。アンケートを取ったところ、「自分たちのクラスに外国人転校生が来て欲しい」が32人「来て欲しくない」が2人という結果だった。「来て欲しくない」と答えた2名の児童の理由は「知らないことを聞かれるかもしれないから」と「不安だからできれば今のままがいいけれど、慣れてきたら平気になる」であった。ほとんどの児童が外国人とコミュニケーションをとることに自信をもったと考えられる。

2週間後、B子ら5人の女子がR君と一緒にボール遊びをしたことを報告してくれた。さらに「図書室で会ったから、じゃあねと言ったらにっこりしてくれた」とか「廊下ですれ違うとき手をあげたら、手をあげて合図してくれた」など、男子からも女子からも、自分からR君に話しかける児童が増えてきた。これらのことから、児童の進んで外国人とかかわろうとする態度に変容があったと考える。

## 研究のまとめと今後の課題

### 1 研究のまとめ

コミュニケーションをとるためには、お互いに共通認識しているベースになるもの（よく知っているゲームや遊び）が必要である。

A L Tを英語指導以外の場面で活用することは、児童のコミュニケーションに対する意欲向上に有効だった。

架空の外国人転校生の話と、その後の実際の遊び活動は、児童に外国人に対する抵抗感を無くし、進んでかかわろうとする気持ちを喚起するのに効果的だった。

### 2 今後の課題

コミュニケーションをとるためのベースとなるもの（音楽や絵画など学年の発達段階に応じた内容のもの）を指導者が精選することが必要である。

児童が恥ずかしがらずに自分を表現できるようにするアクティビティが必要である。

学年の発達段階に応じた、国際理解に関する総合学習を系統的に計画し、実践していく必要がある。

#### <参考文献>

- ・奥田 眞丈 編著 『国際感覚を育む』 シリーズ「学校改善とスクールリーダー」10  
- 特色ある学校を創る - 東洋館出版（1993）
- ・粟田 房穂 著 『遊びの経済学』 朝日文庫（1990）